

【写真『雪と____』】

【写真『雪と____』】

種別：<美術品> 所持：14個

レア度：S

記念写真、悲しみを99癒す 稀に<鎖>化

売値：____円

R S原作において実在しないアイテムです

前書き

こんにちは、もしくは、はじめまして。Rと申します。

AMプチオンリーという凄いイベントが開催されるということで、私も何かやってみたくて、本を作ってみました。

内容はRSの雪と1号のご愛嬌な感じのテキストです。若干、雪シキ要素も入っています。

みんな健在で、雪と1号がいつもつるんでいるような、少しパラレルというかIFな代物です。

基本的におバカで能天気でエロのような健全です。

後半は安心のお約束展開。

深く考えずにお楽しみいただければ幸いです。

ちょこっと自己紹介

RSの白川雪が好きで好きではない人です。

REMっていうAMファンサイトをやっています。

普段はオンラインでのんびり活動、本を出すのは初めてです。

今日はこの本の他に手作り小物も出しています。

この本のCPについて

内容が1雪か雪1が明確でないので、意図的に表記をしていません。

お好みで解釈してください。

私はどちらも好きで、リバも好きです。

ある日、1号の部屋に來た雪が、机の上に置かれた1号宛ての封筒を見付ける。それを手に取って、ひらりとかざして見せながら話しかける。

「よう、これ見たか？」

「またこの季節がやってきたか……」

「おまえ着てくもんあるのかよ」

「去年のがあるから問題ない」

「おまえ毎年同じ格好だよな」

「そういう雪は毎年スーツを変えてすこいな」

「いや、中のシャツだのベストだの組み合わせて使いまわしているぞ。まあ、何着か持つてるけどな、普段使わねえし」

1号に届いた封筒と同じものが、雪に届いていた。それはシキにも。国民全員にも似たような物が届いていた。

届いたものは招待状。催事内容は通称『ジスロフフェスタ』。ジスロフとナナが結婚記念日に、毎年結婚式を挙げるというものだった。国民は、全力でそれを祝うことが義務付けられている。特に王家と関わりの深い者は、祝宴に呼ばれ出席することが習わしとなっている。

式当日、乾杯やある程度の祝辞等が一段落して、歓談の時間が訪れた頃。それまで背筋を伸ばして黙っていた雪達は、寛いで飲んで食べてに移っていた。美味しい料理とアルコールのおかげで、雪の機嫌はだいぶ良くなってきていた。

「先代さん達もよくやるもんだ」

今やジスマが継承しているとはいえ、ジスロフのナナ愛はとどまるところを知らない。彼等の息子達は恥ずかしがり、むくれながら、なんだかんだで毎年欠かさず出席している。その姿は、国民達にとつて微笑ましい限りだった。

「兄さんは毎年祝辞があつて大変なんだよな、もうしゃべるネタが無いって毎回言つてる。それに、自分はこつというのが好きじゃない、向いてないんだって。そう言いながらも仕事だからって、きつちりやつてるのはさすが兄さんだよ。……あーあ、俺も兄さんと結婚式やりたいな。兄さんが式やつてくれるなら、俺、新郎でも新婦でもどつちでもやるぜ！」

「正気か？」

「本気の正気だ」

「いつもの雪だな」

1号は主賓席を見て、再び雪に向き直る。

「雪、オレと結婚式は？」

「しねえ！」

にこにここと笑みを浮かべながら即答する雪。

「そつだな」

雪のにべもない返事にあつさりと頷いた1号は、さして落ち込んだ様子でも無い。こんなことは慣れつこなのだ。雪がいかにシキを好きかということは、知り過ぎるほど知っている。そんな1号を尻目に、雪は自らの夢を繰り広げ続ける。

「式はだめでも何か……そつだ、記念写真とかどうだ？ 今度の俺の誕生日に頼んでみよう」

雪はシキとの記念写真という目的に向かって計画を立て、実行し、実現させてみせた。

誕生日が近付いてきた頃からシキにねだり、ねだるだけでは叶えたらうには足りなかつたので、説得もした。成人してからきちんと写真を撮つたことが無い、思ひ出を残したい等、至極まかつたような理由で攻めていった。努力の甲斐あり、見事シキの兄としての心を動かし、写真館へ行くことが出来た。

雪としては結婚の記念写真のようなものを撮りたかつたが、それは伏せていた。そのうえウェディングドレスを持ち出してはさすがに訝しがられ、下手をすれば写真そのものを拒まれてしまふ

だろつという懸念から自重し、二人分とも純白のタキシードに留めておいた。

更衣室で着替えをほぼ済ませたシキが雪に問う。

「何故こんな格好をするんだ」

「ん……記念写真だから、いつもと違ってフォーマルなのがよかつたんだ」

「それにしてもこの色は落ち着かない」

「兄さんいつも白衣とかワイシャツとか、白をよく着てるじゃないか。それに兄さんには白がよく似合うと思ってるんだ……」

「全身白というのはやはり違うぞ」

雪の言葉を内心でうれしく感じながらも、シキは素直に受け入れがたいというような態度を続けた。

「まあそついわないで。俺も同じ衣装なんだから、二人で並んで撮つたらきまるよ」

「雪……」

いつもながらの弟の押し強さには困つたものだという顔を見せて。しかしいつものとおり弟の願いを拒むことなど出来なかつた。

「おまえの誕生日祝だからな。希望の通り写真を撮ると決めたし……多少のわがままは聞いてやろう」

「ありがとつ、兄さん。大好きだよ！」

シキに抱き着いた雪はスタジオのカメラマンを待たせている

と諫められ、洪々と腕を解いた。別室へ移動し、二人は白い背景の前で写真を撮った。

後日。

1号の部屋を訪れた雪は、いそいそとしながら大きな封筒を開けて、その中身を見せた。先日、シキと撮った写真の現像が出来たのだ。

「どうだ、よく撮れてるだろう」

「雪、いつもと違ってすましてるな。それにしても絵になってる」

「兄さんと俺だからな、当然だ」

機嫌よく答える雪。

1号は感心した表情でしばらく写真をながめた。

「いいな……オレも雪と記念写真を撮りたい」

「面倒だからいやだ」

「撮りたい……」

「……そんな顔するなよ」

少し思案して雪は1号に声を掛けた。

「1号、おまえのカメラ、いま出せるか」

「ああ……ちょっと待ってる、持ってくる」

以前、カメラが欲しいもののどれを選んだら良いのかわからずにいた1号に、雪が付き合って一緒に買いに行った物だった。

「これでいいか？」

「十分だ」

カメラを手渡され、雪は1号と肩を並べると、何気なく自分達に向けてシャッターを切った。すぐにモニターで確認し、二人でそれを覗き込む。二人がフレームの中心にうまくおさまっていた。光の加減も申し分ない。1号はカメラと雪の手の動きを目で追っていたため、ちょうど良く見上げて正面を向いていた。

「よし、バッチリだ、俺けっこう良い腕してる。ハハ、おまえほけつとした顔してるな」

「雪はいつも通りな感じだ、さっきのシキとの写真と全然違う」

「俺達だつたら澄ましてるんじゃないやなくて、こういう日常の方がらしくていいんじゃないか」

「そつだな……気に入った」

1号は薄く微笑む。

「こんなので良ければ、もう少し付き合おうぜ」

「頼む」

「じゃあ……つと」

突然に雪はシャツを脱ぎ捨てて上半身裸になった。隣にいる1号は普段通り上を着ていない。

片腕をぐつと伸ばして、カメラのレンズをこちらに向けて。またしても雪は自分のペースでシャッターを切る。何枚か撮って、その間1号はきよきよとするばかりだった。

「……なんで脱いだんだ？ オレはどうしたらいいんだ」

「ほら、カメラの方を見ろよ」

雪に言われてやっと落ち着いて正面を見る。その姿勢で更に数枚の写真を撮った。

先程のように、撮ったばかりの写真をモニターで確認していく。「うまいこと上半身だけ写ってるな。男一人裸ってエロくねえか」

「そうか？ オレはいつも通りだし、雪も健康的な体だからそんな雰囲気ではないが」

「まあ、体育会系っぽさは認める。季節感は無いけどな」

まだ夏の暑さには程遠い季節だった。

「雪はエロい写真が撮りたかったのか」

「ネタだ、なかなかおもしろえ」

狙い通りで気に入ったという風に、雪は写真を送りつつ眺めた。

「おまえの色気の無さが良い」

「……一緒に写真が撮れたし、雪が楽しそうだからいいか」

「よし、もう少しそれっぽくしてみるか」

そう言って、雪は1号のベッドに寝転んだ。

「こつちぎてここに横になれ、ゆっくり来いよ」

不思議に思う気持ちはあるが、雪に構われるのはうれしい。言われるままに1号は雪に近付き、隣に腰を下ろし、上体を倒して横になった。雪はその一部始終を撮っていた。最初は見上げる角度で、徐々にカメラを水平に戻して、1号が仰向けになって天井を見ると、その視線を遮るようカメラを頭上に向けて腕を伸ばし、更に自分達を撮った。

「そのまま俺の方を向け、顔だけじゃなく体ごと」

左腕とカメラの位置を固定して、雪も1号の方へ寝返りを打ってシャッターを切る。

「次は目を瞑ってみろ」

更に1枚。

「こんなもんな」

雪は一人で写真を確認しながら笑つ。

「目を瞑るとそれなりにそれらしい、1号でもな。無いはずの色気が、有るよう見えなくもない。面白え」

「どんなふうに撮れてるんだ、オレも見たい」

「後でな」

1号には寝てると言って雪だけ身を起こす。

「今度はどうするつもりだ」

「いいからいいから、俺に任せとけ」

雪はベッドを下りて立ち上がり、少し屈んでカメラを下方へ向けて構える。

「寝返り、次は腹這いだ」

「ごうか」

1号は首だけ後ろに向けて振り返る。

「いい感じだ、そのまま」

黙々とシャッターを切る。

「うーん…… やっぱ上半身だけじゃ物足りないか。ちよっと下を脱いでみる」

「別に構わないが、下着も全部脱ぐか？」

「いや、そこまでしなくていい、ズボンだけ」

「雪の加減はよくわからないな」

不思議がりながらも大人しく脱ぐ、そんな1号が雪には可笑しい。

それから雪は1号に寝返りを打たせたり、手足の動きや格好に注文をつけながら撮り続けた。

「……なんでオレばかり写してるんだ？」

「なんとなく。気にすんな、俺との写真は撮ったからもういいだろ」

「あれはまともな写真か……」

「問題無い。さて、と」

雪は前置き無しに1号の下着を掴んで少しずりおろす。

「なんだ、やっぱり脱ぐのか」

「違う、中途半端なのがいいんだ。寧ろ中身は用が無え」

「オレにはよくわからない」

「そういうもんさ。というか気分だな、今日の俺の。さあ、適当に転がって撮られてろ」

雪は気が済むまで、機嫌良く写真を撮り続けた。

「はあ……満足した。カメラは置いてくから好きだけ見ろよ」

「オレのカメラじゃないか。雪、もう行くのか？」

1号はシャツを羽織る雪に声を掛ける。

「気が向いたらまた来るさ」

「今日撮った写真は持ってかないか」

「いらねえ、じゃあな」

楽しむだけ楽しんで、持ってきた大事な記念写真を抱えて、雪は出ていった。

更に後日。

ある朝、雪が出勤して隊室へ入ると、部下から封筒を渡された。

「なんだ？」

「拾得物として届けられました。隊長の物ではないかということ、こちらに来たようです」

「そうか、確認する」

糊付けされていない封筒を開けて、その中身を見て、雪は顔色を変えた。

「……なんだ、これは……」

見覚えがあるものだった、それは先日1号とふざけて一緒に撮った写真だったからだ。問題はなぜそれが紙の写真の状態でここにあるのかということだ。よりにもよって二人で向かい合って裸で寝ている……ようにしか見えない写真だ。しっかりと眼帯が写ってしまっているから言い訳のしようも無い。

雪が怒りに身を震わせていく様を隊員達は息を飲んで見ていた。

「誰か……この中身を見たか？」

隊員の一人が怖ず怖ずと声を上げる。

「届いた時に異常がないか確認のため……」

雪は眩暈のする思いで深く息を吐き、何とか心を落ち着かせる。

「それは適切な判断だ……危険や問題は無かったってことだよな」

「はい……」

「じゃあ問題は解決済みだ、俺が受け取ったことだし……この捨得物は無かったことにする。全員いいな！」

「はい！」

「了解しました！」

隊員達の返事を確認して、ふと雪は思い出す。これを拾って届けたのは誰だったのか、どこで拾われた物なのか。ただそれを部下達に問い質すのは、直前の自らの発言により、言うに言えなくなってしまう。自分の手で記録を調べたが、結局たいした情報は得られなかった。

今すぐにでもやりたいことは一つ。

一つは、兄が万が一にも、これを目にしていないかという確認。もう一つは、1号ぶん殴る！

気持ちは逸ったが、勤務時間内ということもあり、仕事を投げ出す訳にはいかなかった。帝国軍本部での会議があり、どうしても外せなかった。

集中力を欠きながらも、何とかその日の仕事を終えて飛び出す。

兄が1号か、散々迷った末に、先ずは怒りの矛先の向く方を選んだ。

「バカヤロー！俺の手で始末してやる、俺が殺してやるから死ぬえ！」

雪は1号を捕まえて開口一番怒声を浴びせた。

「雪にそう言われるのは久しぶりだな」

「のんきに笑ってんじやねー！なんだこれは！」

雪は例の写真を1号に突き付ける。

「オレが現像した写真……雪が拾ってくれたのか。夕べどこかに落としたみたいで探していたんだ、ありがと〜」

「現像した……落とした……だ」と

「写真屋にカメラを持って行って頼んだ。オレは印刷の仕方がよくわからないから。雪の撮った写真はよく撮れてるな、現像したらモニターで見ると違って、こっちも良いと思う。オレだけ写ってる写真ばかりかと思ったら、雪と一緒にのもけっこうあつてうれしかった」

「1号……」

雪は1号の腹部に拳を叩き込み、更に膝蹴りも食らわせた。渾身の力を込めて、容赦などせずに。1号は不意打ちの二発をまともに喰らったが、以降の攻撃はかわして、とりあえず雪の動きを制止した。

「離せ、止めるんじゃねー、大人しく殴らせろ！ 誰が避けたり止めたりしていいって言ったんだバカヤロウ！」

揉み合った揚句、雪は腹這いで床に伏せられ、その上に1号が跨がり押さえ込んでいる。1号の重さに若干呻きながらも雪は威勢よく声を荒げた。

「雪の言ってることは目茶苦茶だ」

「おまえのやってることの方が目茶苦茶だ」

「攻撃を止めることの何がおかしいんだ」

「そっちじゃねー！ 写真屋に持ってくとか、落とすとか、人に

見られんだろう！ そもそも持ち歩くな！ 現像だってプリンターでいいだろ、おまえ持ってんじゃねーか……簡単だろうよ」

「雪、そんなこと言わなかった」

「常識で考える、いや、俺の気持ちを考える」

「楽しそうに写真を撮ってた」

「長生きしているのにこの役立たずが！ いっぺん死んだら力は治るのか？ 兄さんの教育が足りなかった？ いや、そんなことはある筈が無い……俺が教育を徹底すべきだった？」

雪が思考に陥り暴れる動きを止めたため、1号は腕の力を緩めた。しかし、また暴れ出してはいけないと、上から退かずにいた。

「重い……」

訴えても動かずにいる1号に、雪は更に声を上げる。

「重いんだよ、1号。いい加減に退け、殴るのは今はやめるから」

「蹴りや体当たりも無しだぞ？」

「ああ、何もしない。カツとなり過ぎた。状況分析をする」

「分析……？」

「おまえに話しを聞くだけで」

合点がいつて、1号はようやく雪の上からどいて解放した。

「ったく、ムダな馬鹿力をもってやがる……」

プツプツと言いながら身を起こして、雪は1号に問い始めた。
「写真屋に行ってきたのはいつだ？」

「昨日」

「あの日に撮った写真のうち、現像したのは何枚だ」

「雪と一緒に全部」

「雪は感情をくつとこらえて、淡々と聴取を続ける。

「落としたのは何枚だ」

「これ一枚だけだ」

「昨日、いつどこでこれを失くした？」

「はつきりとわからないが……写真屋からの帰り道だと思う。店を出て道の途中まで、写真を見ながら歩いてた。全部鞆に戻したはずなんだが、帰宅して一枚足りないことに気が付いた」

「よくそれに気付いたな、おまえにしちゃ上出来だ」

「そうか……」

「ほめてねえ……まあだいたいのはわかった、写真屋は近所の店だよな？」

「店の前を雪と通ったことが何度もある、あそこだ」

「……とすると拾ったのは一般市民の可能性が高いと。届けられたのはおそらく俺の顔が知られてるからか……。研究所やその近辺じゃないってことは兄さんに見られてる可能性は低いだろう。念のために後で確認するが、急がなくても大丈夫そうだな」

「解決したのか？」

「おまえに言われたくない台詞だな……今回のことは、多少は俺にも責任があるし、おまえは言わなきゃわからないし……」

「穏やかな表情の1号の前で雪は溜め息ひとつ。」

「どうしたらいいか、どうしちやいけないか、俺が言えばわかるよな」

「受け入れられる内容ならば、あと覚えていられれば」

「紙にでも書いとけ。あの写真の現像は禁止、モニターで人に見せるのも無しだ」

「雪の話は続く気配があつたが、たまたまに1号は割り込む。

「どうしてだ、そんなに困るのか？ 写真を撮ったのは雪なのに」

「クツ……おまえはいつになつたら恥ずかしいという感情を覚えるんだ」

「恥ずかしいからいやなんだな」

「そうだ、人目に触れるのは恥ずかしいんだ、ああ……一々こつこつ説明するのも恥ずかしい」

「雪は今も嫌な気持ちなのか」

「いや、いい。余計な混乱はするな。話を続ける。持ち歩きもするな……現像した写真とカメラは俺が預かるから寄越せ」

「現像しないのはいいとして、写真とカメラを渡すのはいやだ、オレのだ」

「じゃあ……カメラはおまえが持つていいから、データの入ったカードだけ新しいやつと交換、紙の写真はやっぱ寄越せ」

「オレが見れないじゃないか」

「俺んどこ来れば好きな時に見せてやる、別にいつも持つてなく

たっていいだろ」

双方の主張は噛み合わずにしばらく言葉が途切れる。

少したけ1号が表情を変えてひとことこぼした。

「天井……」

「それは腹が減ったってことが、それとも取引か」

「両方だ、雪の作った天井が食べたい」

「俺だっけ減ったさ、この時間までろくに食べてねえ……」

それからひとしきり唸りつつ考えて、たっぶりの間を空けて、

雪は結論を口にした。

「材料はあるのか？」

「米と粉しか無い」

「買いに行くか……」

その言葉を聞いて1号はカードと写真を取って来て雪に渡した。

「確かに預かった、換えのカードはすぐに渡すからな」

買い出しへの道、1号は「海老、ナス、シシトウ……」と食べたい具材を確認するように何度も復唱していた。

二人で歩き出してしばらくして、1号はふと気が付いて雪に問いかけた。

「データは消さなくていいのか」

「そこまではな……言つたろ、人に見られなきゃいいんだよ。それにちょっと勿体ねえしな」

夜空を見上げて雪は軽く笑った。

後書き

ここまでお付き合いいただき、どうもありがとうございます。

AM作品はけっこう昔からちょこちょこと遊んでおりましたが、RSプロモムービーで雪に一目惚れしたことが大きな転機でした。更にRSが楽し過ぎてファンサイトを作り、出力を始めました。それから少しずつAMファンの方と交流することが出来て、世界が広がりました。なんて魅力的で面白い。そして今回、AMプチオンリーというきっかけによって雪本を出したいと思い、初めて同人誌を作りました。今までたくさんの力や元気をいただいております、有り難いことです。

雪のことを色々と想像し、夢見ています。RSの旅の頃、過去に遡って幼少時に思いを馳せ、RSのその後のこと、ぢきゅう島での暮らし、はたまたパラレルの世界など。

その中から今回はプチオンリーというお祭りということで、好きCPでご愛嬌だけれど健全というコンセプトにしてみました。笑って楽しそうにしている雪の姿が見たくて……。結果、殊更に軽いお話になりました。

本来は、やおいもゆりもノンカプも、健全も大人向けも、様々な作品のテイストも、みんな愛しく楽しいです。わー。

短いですが、最後に。AM本家様方、プチオンリー委員会様方、そしてお付き合いいただいているAMファンの方たちへ、感謝の気持ちをこめて。

あ……、雪の好き台詞「……へへ」を入れそこねてしまいました。

奥付

タイトル	【写真『雪と____』】
発行日	2010.10.10 (AMプチオンリー)
サークル	REM
著者	R
連絡先	http://www.geocities.jp/rem_parity/
印刷	コンビニのコピー機にて

アンディー・メンテ / RSファンブック

2010/10/10 REM